「工芸」から「デザイン」へ
工芸指導所から産業工芸試験所へ

松戸市教育委員会 学芸員
森　仁史

はじめに

現代の産業界において、デザインのしめる割合は年々大きくなり、デザインの無い製品開発はあり得ない状況といえるでしょう。

かつて、工芸と呼ばれた職人の技術をデザインという新しい基準に応用し、産業の発展へ、さらには世界レベルの水準向上へと推し進めてきたのは、先人のたゆまない努力でした。

この連載シリーズでは、３回にわたって、産総研の歴史の一部ともいえる日本の工業デザインの歴史について紹介いたします。

産業工芸試験所
1952 年に移転した東京都大田区下丸子の庁舎（1956 年撮影）

工芸指導所の誕生

現在では、「工芸」は美術工芸を指す用語となっていますが、これはごく近年になってからのことです。産総研の前身となった機関のひとつでもある「工芸指導所」の名称からも、当時の認識が読み取れます。

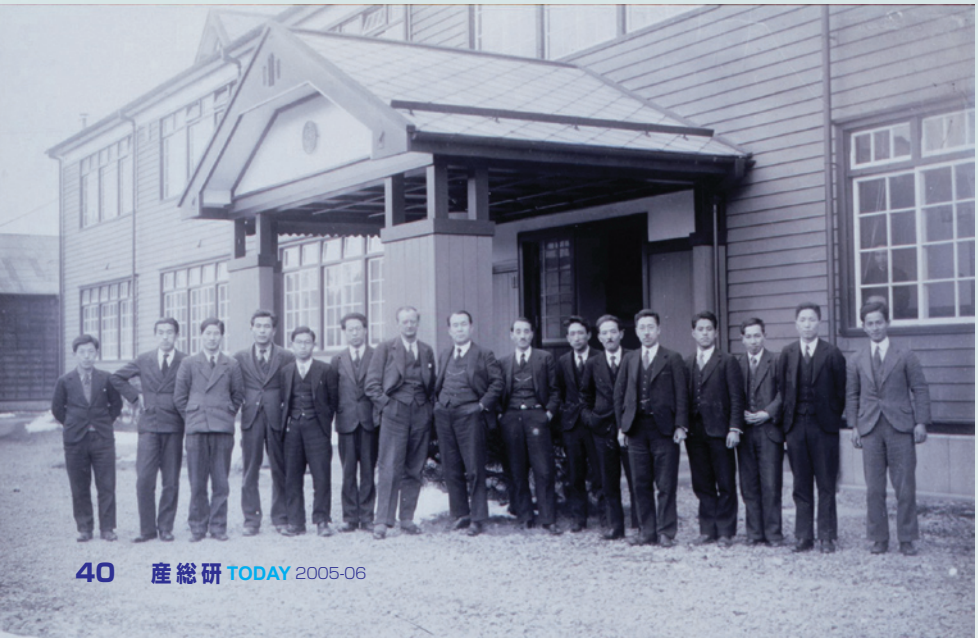
工芸指導所は、1928（昭和3）年11月、仙台に当時の商工省によって創設されました。産業工芸から伝統技法にわたるものづくりの広い範囲を工芸ととらえ、その科学的研究ならびに輸出振興が設置の主要な目標でした。日本初の国立のデザイン指導機関ということになります。

モダンデザイン導入への取り組み

当時、工芸指導所では、世界の最新動向を把握しながら実験的な試作を行い、勃興しつつあったモダンデザインを取り入れて改良を図ろうとしていました。そのために、世界的なデザイナーであるB.タウトや C.ペリアンが招かれました。

また、それまで国内の各地で培われてきた伝統技法を産業に応用することにも力を入れ、KS磁石の工芸品への応用、金属粉を漆塗りに応用した玉虫塗、実用新案をとった金工の打込象嵌などが具体的な成果として残されています。

こうしたさまざまな実験は1930年代の日本のデザイン・工芸の歴史に大きな影響を与えた業績として知られています。



B. タウト来訪記念写真
工芸指導所（仙台市榴ヶ岡、1928 年竣工）正面で撮影。
中央の二人が、B. タウトと國井所長。

トロント国際見本市商談室（1954年）

戦時中の闇をぬけ、再びデザインの光を

1940（昭和15）年12月、工芸指導所は東京に移転しました。この頃から戦火が激しくなり、研究の中心は家具の標準化による資源節約や軍事技術としての木製飛行機部品の研究開発、代用品の研究に振り向けられていったのでした。

終戦をむかえると、経済復興を支える重要な政策として、再びデザイン振興がスポットを浴びました。工芸指導所の新たな取り組みに、戦前の研究や技術開発がおおいに役立ったことは言うまでもありません。

本格的にデザインが産業に活かされる時代へ

1952（昭和27）年4月に、工芸指導所は産業工芸試験所と改称し、インダストリアル・デザインの指導・研究が主要な業務となりました。1950年代まで、ほとんどの日本企業（とくに製造業）には、専門のデザイン部門はありませんでした。当時、産業工芸試験所は、東芝やソニーからもデザインの委託を受けていたのです。

国際レベルのデザイナー養成を目指して

産業工芸試験所では、G. ネルソン、E. ソットサスといった著名なデザイナーを海外より招聘し、企業のデザイン部門をはじめとするデザイン関係者を実地に指導する場を積極的に設けました。さらにJETRO等と共同して国際見本市等での対外宣伝に努め、世界市場に向けて個性が発揮できるよう指導するとともに、製品管理や包装の合理化、色彩研究などといった関連分野まで、その業務範囲を広げて指導に努めました。

ここから、秋岡芳夫や剣持勇、豊口克平ら日本を代表するデザイナーが輩出していったのです。

時代とともに新たな活動体制へ

1960年代に入ると、デザイン活動の中心は企業へと移っていきました。大きな役割を終えた産業工芸試験所は、1969年に製品科学研究所（産総研の前身である工業技術院に属した研究所のひとつ）として組織再編を受け新たな役割を果たしていきました。

規範原型椅子 C1